

アンドレ・モロワ著「フランス史(上)」新潮社 1956年6月20日刊を読む

起源と中世

1. この国の生活に於いて本質的な役割を演ずべき、なお二つの特徴が、すでに中世から極印されている。
 - (1) フランスは百年戦争の期間中に、フランスを意気沮喪させかねまじい甚だしい災厄を蒙った。
 - (2) しかしその不幸の終末から僅か数年後には、フランスはふたたびヨーロッパ第一の強国になっていた。
 - (3) それは一部はその地味の肥沃さと、農民の労働にもとづいていたが、また一部は、自己の運命に対する本能的な信念と、フランス人はフランス人以外にはなり得ないという極めて根づよい確信にもとづいていた。
3. 第二の特徴はフランスの世界的な使命に対する信仰である。
 - (1) フランス人は、縁辺の文明に属しているためであろうか、ある思想体系の真実についてあらゆる人間を納得させることが可能であると信じたがる。
 - (2) 中世紀に於いては、パリ大学はヨーロッパのために考える。
 - (3) そして、ローマ教会はこの知的卓絶を認める。
4. 17、18世紀に於いては、それとちがった形式で、同一の現象が観察されるだろう。
 - (1) 単一世界社会の理念が他日勝利をおさめるならば、必ずやフランス人はその社会で真先に精神的影響を及ぼす仲間にはいるであろう。
 - (2) 彼等はつとに12世紀に、同質のキリスト教世界の概念をいだいた。
 - (3) 軍団の力によってでなく、全員一致して承認された真理によって統一されたヨーロッパという理念は、サント・ジュヌヴィエーヴの丘(パリの南岸の高い丘、中世には学校、修道院、教会があり、今尚パリの大学、文教の中心地)の上で生まれたのである。

P158 ~ 159

<コメント>

フランスの思想家アンドレ・モロワによるフランス通史。「アメリカ史」「英国史」(ともに新潮文庫で上下版)にひきつづき、母国フランスの通史を万感の思いで一人で執筆。新潮文庫上下2冊だが、読みごたえがあります。復刻版がありますので、是非、御挑戦を。

2020年6月2日(火)